

牧師の娘の日記

Dear Diary by HighVoice

×月×日

今日は恒例の春の園遊会。私も飲み物のスタンドの後ろに立って甲斐甲斐しく働いた。私は牧師の娘。牧師の娘らしく、可愛らしく、上品に振る舞わなければならない。

教会の庭園には、うららかな春の日差しが降り注いでいる。楽しく歓談する敬虔な信者たち。そのなかに、彼がいることに気づいた。

口のなかに苦いものが充満してゆくのを感じた。

彼は言った。私は「天使のような娘」なのだそうだ。彼は「お前みたいな優等生じゃなくて、もっと不良っぽいのがいいんだよな」と言った。

たしかに……私は優等生かもしれない……。

レモネードがなくなったので、ママに「地下室にいつて冷蔵庫から瓶ごと持ってきて」と言われた。私は一瞬躊躇した。地下室は、とても怖い場所だった。セメントで塗り込められ、ネズミやクモもいた。

一人で薄暗い階段を下りながら、ふと寒けを感じた。誰かがこっそりと自分を見つめているような気がしたのだ。私は走りだした。靴音を響かせながら、階段を駆け降りた。

突然、私は肩を掴まれた。強い力だった。私は叫んだ。

手の主が誰かはすぐに分かった。私は肩の手を振り払った。

「そんなに邪険にすることはないじゃないか」

私は彼から離れ、レモネードの瓶を取り上げ、階段に向かって歩き出した。

「会ったらすぐ分かるよ、彼女はとてもいい子だつて。二人とも友達になれるはずだ。もちろん、焼き餅をやく気持ちは分かるけどさ……」

「焼き餅ですって！」

私は瓶を取り落とし、彼に向かって突進した。

「焼き餅なんて……やくはず……ないじゃない。あんな……あんな淫売に！」

私は混乱していた。心が混乱したまま、体が先に動いた。

私のサンダルがはねあげられ、彼の股間に衝突した。

自分がやったことに気づくまで、一瞬の間があった。

彼は床に転がって悶えていた。私は、突然沸いて出た力に興奮していた。そう、興奮していたのだ。今までの自分にはとうてい出来なかった行為が、突然できるようになった。何故かはわからない。私はただ、身体が欲求するままに動いていた。

私は屈み込んで、彼の陰囊を握りしめた。彼は悲痛に呻いた。掌のなかで、彼の睾丸が苦痛にわなわなしているのが感じられた。

私が彼の陰囊をぐいと引つ張ったとき、彼の表情は、苦悶というよりも驚愕に満ちていた。彼を無理やりに立たせ、さらに力をこめてひねりあげた。

彼の哀れな睾丸が、私の掌のなかでますますわなわなしている。その感触がますます気に入った（正直にいうと、私は性的な意味で興奮していた）。私は、彼が爪先立ちにならざるを得なくなるまで引つ張った。

これ以上引つ張ると千切れてしまうまで引つ張りあげ、それから手を離れた。彼はセメントの床に倒れ、悶絶した。

私は哄笑した。私は楽しんでた。

彼が私を傷つけ、楽しんでたように。

彼はただ、股間を両手で抑え、呻いていた。

私は笑いながら彼に近寄った。そして髪の毛を引つ張って、上半身を起こさせた。

「私は、優等生？」

言いながら、私はサンダルを脱ぎ捨て、彼の股間に足を乗せた。彼は抗ったが、私は全体重を

彼の陰囊に乗せた。

彼が呻いた。私はまた笑った。

そろそろママが探しにくる頃だ。その前に、彼に、私にやった行為を後悔させなければならぬ。

私は彼を仰向けに押し倒し、両手で彼の両膝を抑えて屈み込み、それからそろそろと上体を浮かせた。

彼の両目に恐怖が浮かんだ。彼は、次に起こる事態を予想して震えていた。

私は思い切り、自分の膝を彼の股間に叩き込んだ。

彼の呼吸が一瞬止まった。

私は立ち上がり、レモネードの瓶を拾い上げ、立ち去ろうとした。

そのとき、背後から投げかけられた言葉を聞いて、立ちすくんだ。

「どこで……覚えてんだ……」

私は凍りついたように動けなかった。

「すばらしかったよ……」